

聖書：コリント人への手紙第二 5：6～10

説教題：願うのは、主に喜ばれること

日時：2024年11月24日（朝拝）

パウロはこの5章前半で、将来与えられる復活の体に関する自分の確信を述べて、これに支えられて苦難をも厭わない自らの福音宣教の歩みがあることについて語っています。この背景にあるのはコリントに入り込んでいた偽教師たちの存在です。彼らはパウロの宣教に苦しみが伴っているのを見て彼を見下していました。神の救いの祝福を宣べ伝える者がなぜあのような困窮した状態にあるのか。つまり彼は神から遣わされた使徒ではないと。それに比べて我々は何と立派で、神の祝福にあずかっている者たちか！と自らを誇っていました。そんな彼らの影響を受けつつあったコリント教会にパウロは4章16節で偽教師たちが誇っているような外面的なこと、外なる人は日々衰えると言いました。大事なのはキリストにある内なる人である。キリストに結ばれている人はキリストに倣い、キリストの足跡に従って歩む人で、キリストが十字架を通して栄光へと入ったように、キリストに従う苦難の道を通してこそ栄光に至る。そしてやがて復活のからだをいただくに至ると。

5章に入って1節でパウロは今の私たちの地上のからだを幕屋にたとえました。一方でやがて天でいただく体を建物と表現しました。現在のからは幕屋のように造りが華奢で、壊れやすく、一時的なものです。やがて与えられるからは建物のようにながっしりしていて恒久的で、永遠に続きます。また今のからは4節で「死ぬはずのもの」と言われているように死の力に服しているものですが、やがて与えられるからは死をも呑み込むキリストの圧倒的な復活のいのちの力によって、死の影さえない、いのちに満ち満ちたものとなる。そのような天からの住まいを着ることを待ち望んでいるとパウロは述べました。それは5節で、神がご準備くださったものであって必ず実現すること、またその保証として神が御霊をくださったことも述べました。

これらを受けて今日の6節は「ですから、私たちはいつも心強いのです」と始まります。この「心強い」とは「確信がある」とか「非常な安心がある」という意味です。この確信のゆえに勇気をもって日々様々なことに当たることができるということです。その確信とは、これまで見て来た通り、復活の体が最後に用意されているということです。幕屋が壊れても、これに代わってはるかに勝るからだをいただくのです。

ですから心強いのです。

その後の部分は「ただし」と始まります。「心強いのです。ただし」と聞くと、一瞬あれっ？と思ってしまいます。トーンダウンしているように聞こえます。しかしそういうことをパウロは言おうとしたのではないようです。原文には「ただし」というような打消しや留保を示唆する言葉はありません。ではどういう流れになっているのかを見る前に、まずここで言われている言葉を見て行きたいと思います。

パウロは6節で「肉体を住まいとしている間は、私たちは主から離れているということも知っています」と言います。ここも初めて読むと、あれっ？と思います。イエス様はマタイの福音書の一番最後で「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」と言われたはずではなかったか。天に上げられたイエス様は聖霊を通して今日も私とともにいてくださるのではないかと。確かにそれはその通りです。しかしこの後、8節で肉体を離れた時、主のみもとに住むという状態になると言われます。このやがての状態との比較においてパウロはこういう表現をしたということです。参考になる箇所としてコリント人への手紙第一 13章 12節にこうあります。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることとなります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることとなります。」ここに今の私たちは鏡にぼんやり映るものを見ている状態であるのに対し、やがては顔と顔を合わせて見る状態になると言われています。つまりより直接的に神を知る者となる。また今知っているのは一部分だが、やがては完全に知ると言われています。それと同じことが今日の箇所の7節で言われています。今はまだ見ていません。今は信仰によって歩んでいる状態です。そういう意味でやがての状態に比べるなら今は劣ることとなります。しかし8節にある通り、肉体を離れる時、すなわち死の時、より直接的に主のみそばに住むこととなります。同じことをパウロはピリピ人への手紙 1章 21～23節で語っています。彼はそこで「私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です」と語り、どちらの状態も良いが、私の願いとしては世を去ってキリストとともにいる方が良いと言っています。今のこの地上でも主とともにあるとは言えますが、将来はもっとそうなのです。今日の8節でも、その「ほうがよいと思っています」と彼は言っています。

このことを考慮すると話の流れが見えて来ます。パウロは6節で「私たちはいつも心強い」あるいは「確信を持っている」と述べました。そして彼が続けて述べたのは、肉体を住まいとしている間は主から離れていることを知っているということです。これは言い換えれば死の時が来たなら、もっと素晴らしい状態に移行することを知っているということです。すなわち主のみもとに住むことになる。だからこの知識に基づいて私は恐れることなく、苦難を伴う福音宣教に従事できるということです。苦難の先には死があるでしょうけれども、そこで私に用意されているのは今より素晴らしい、主とともにあるという状態です。そのことを見つめている者として、いかなる苦難が必要とされても私は確信を持ち、心を強くされて、福音宣教に従事すると彼は言っているのです。

ここに信仰者の死後の状態に関する聖書の慰めのメッセージがあります。死の向こうには今よりはるかに良い状態があるのです。ある人が書いていたことですが、もし私たちが一般の人々の平均年齢よりもずっと早く召されることになったら、どう思うでしょうか。もしかするとある人は、人間的な感覚から言えば、人々がこの世でまだまだ人生を楽しんでいる中、そのパーティーから一人さみしく去って行くことのように思うかもしれません。できれば私ももう少しみんなと一緒に地上のパーティー会場にいたかったと。しかしそうではないとその人は言います。私たちは死の時、パーティー会場を去るのではなく、むしろパーティーに行くのであると。イエス様とともにいるという最高のパーティー会場へいよいよ向かうのであると。私たちが望むパーティー会場はこの世にあるのではなく、私たちの行く先にあるのです。この世に残される側の人は、愛する人がいなくなって寂しく思いますが、本人はより素晴らしい状態、最高の状態に移行します。ですから私たちは自分がいつ死を迎えるかは分かりませんが、その時が来たら思うべきです。私は今からパーティーに行くのだ！みんなより一足先に本当のパーティー会場へ呼ばれたのだ。いよいよイエス様のみもとに住む状態に行こうとしているのだ。それはパウロが言うように、今よりもはるかに望ましい状態なのだ。

こうして9～10節につながります。9節は「そういうわけで、・・・私たちが心から願うのは、主に喜ばれることです」とあります。「そういうわけで」とは、どういうわけでしょうか。パウロは今、やがて主とお会いする時のことを述べました。主のみそば近くに住む日が来ます。主と顔と顔を合わせて相まみえる日が来ます。このこと

から出て来る当然の思いがこれであるとパウロは言っているわけです。それは主に喜ばれたいということです。主に会いして主に喜ばれる者でありたい。そしてこれとセットなのが 10 節です。10 節の文頭には「というのは～だからです」という言葉があります。つまり主に喜ばれたいとパウロが 9 節で語った時、彼が考えていたのは 10 節の最後のさばきの時のことです。そこですべてを調べられるという日が来ることを思って、主に喜ばれる者でありたい。ですから 9 節と 10 節はワンセットのことです。

まず 10 節から見ます。さばきの座と聞くと私たちは緊張するかもしれません。誰がさばきの座の前に立たされるのでしょうか。10 節最初に「私たちはみな」とあります。つまり全員です。クリスチャンも、ノンクリスチャンも皆です。そこで何を問われるのでしょうか。「それぞれ肉体においてした行い」とあります。この地上のからだで生きている間に私たちがしたことすべてです。それは外側に現れた行為だけでなく、口から出した言葉も、心の中の思いも含みます。さばきの座の前に「現れなければならない」と訳されている言葉は、「明らかにされる」という意味の言葉です。このことと同じことを語っているローマ人への手紙 2 章 16 節で、この日は「人々の隠された事柄をさばかれるその日」と言われています。人々に知られていなかったこと、あるいは自分でさえ気づいていなかったこともすべて明るみに引き出され、調べられるのです。「それぞれ」とありますように、これは一人一人に行われます。十把一からげにはありません。個人個人が調べられ、その行いに応じて報いを受けます。そのためにさばきの座の前に出るのであるのです。そのことを思って主に喜ばれる者でありたいとパウロは言っています。

このⅡコリント 5 章 10 節は、もしかすると多くのクリスチャンが戸惑いを覚えるみことばかもしれません。ある人は思います。私たちの罪はイエス・キリストを信じすべて赦されたのではなかったか。救いは行いによらないのではなかったのか。なのにやがて行いが調べられ、それが問われるとは、福音と矛盾するのではないかと。しかしここでのさばきは、これによって永遠の滅びに処されるかどうかが決まるというさばきではありません。ローマ人への手紙 8 章 1 節：「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」 主を信じる者が、これによって救いを失うことはありません。このさばきは評価のためのものです。それによって報いを受けるためのものです。

では私たちの行いにはどういう意味があるのでしょうか。結論から先に言うなら、行いはそこに生きた信仰があることの証拠です。信仰の実です。私たちは行いによって救われるのではなく、ただイエス・キリストへの信仰を通して救われます。恵みのゆえに、私の功績によってではなく、キリストの功績に基づいて救われます。しかしキリストに真につながっているなら、その人からはそういう者らしい行いが生じて来るはずで、それは真の信仰がそこにある証です。ですからヤコブはヤコブの手紙2章20節以降で、行いのない信仰は無益であること、信仰は行いによって完成されること、行いのない信仰は死んだものであるとあって、信仰と行いは切り離せないことを述べています。あるいはパウロはエペソ人への手紙2章8～10節で、私たちの救いはただ信仰によるものであり、行いによらないと述べた直後に、「神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました」と語り、良い行いが続かなければならないと述べています。こういう観点からやがての日に行いが調べられるのです。それは私たちの信仰そのものが調べられるということと同じなのです。

この御言葉を読んで私たちはどう思うのでしょうか。すべてが明らかにされ、調べられたら、何も良いことがないと暴露されてしまうと恐れるのでしょうか。しかし反対から考えて、果たして自分の行いに自信を持ち、これなら私は豊かに報いを受けるだろうと思いつつ、さばきの座の前に立てる人などいるのでしょうか。たとえ私たちの中で最高の行いをした人でさえ、その行いは完全なものではありません。そこには必ず罪の染みがあります。それもまたキリストの血による赦しがないとすれば到底神の前に受け入れられるものとはなりません。それは私たちの場合も同じだと思います。すべてが明らかにされるこの日、私たちがいくらかまだまじだと思っていた私たちの良い行いも、いかに罪にまみれたものであるかを私たちは初めてのように知ることになると思います。私たちが考えていた以上に汚れで一杯。私たちはこのことを通して、自分の救いはただただ神の恵みによることを、これまで思ってもみなかったレベルで知ることになるでしょう。そういう意味でこの日は神の恵みと神の栄光がこの上ない仕方で示される日になります。そこで明らかにされる私たちの罪は、その後で断罪される罪として引き出されるのではなく、キリストにある者の赦された罪として引き出されます。その日、そのように初めて明るみに出される私たちの罪が何と多く示されることでしょうか。それは何と厳粛な日、ただ神の栄光のみがたたえられる日となるのでしょうか。

しかし素晴らしいことは、私たちの行いはみな罪にまみれて悪臭を放っているから、それらは全部意味がないとはされないということです。キリストはその罪の染みで覆われたような私たちの行いの中に良いものがあることを認めてくださり、「よくやった！」と言ってくださるのです。私たちのしたことすべてには必ず罪の染みがありますが、その中に真の信仰から出たもの、キリストへの愛から出たものがあることを見つけ出して、「あなたはよくやった！わたしを愛して、あなたはわたしの戒めに従い、このようにした！」と言って取り上げてくださり、ほめてくださり、さらには報いまでくださるといいます。本来私たちの良い行いはただ神の恵みによって生み出されたものなのに、神はそれを見て喜び、賞賛してくださるのです。

パウロはやがて主のみもとに住むことを見つめて、主にお会いする時、このように言われる者でありたいと言っています。主が良いものを見つけてくださって、あなたはよくやった！あなたはわたしが与えた救いの恵みが良く分かり、それを受け止め、そこに真に生きて来た！と言って、喜んでくださることに至るように歩みたい、そこに自分の言い尽くせない感謝を表したい、と言っています。私たちも同じだと思います。やがての日は近づいています。主と直接にお会いし、主のみもとに住む日が近づいています。私たちはこの確信に支えられて日々を歩んでいます。私たちの歩みは最後まで不完全なもの、欠けだらけのもの、罪の染みだらけのものでしかありませんが、主はそこに良いものがあるなら、それを見つけ出し、それを認めて、喜んでくださいます。そして報いまでつけてくださいます。その主とお会いする時に主に喜ばれる者となることを目指して私たちも日々を歩みたいと思います。そこに私たちの感謝と愛を表し、その歩みが主に喜ばれ、そうして栄光のからだをいただいて天の御国での永遠の生活へと入って行く、主にある者の幸いな歩みを導かれて行きたいと思います。